

新型コロナ

県内第6波 126人後遺症

せき、倦怠感目立つ

県は十五日、新型コロナウイルスの県内流行「第六波」（今年一月から）での感染者に関し、百二十六人が後遺症とみられる症状を訴え、県内の医療機関で治療を受けたと明らかにした。せきや倦怠感の症状が目立つ。六人は三カ月以上症状が続いた。県は感染後の症状が続く場合、かかりつけ医の受診を勧めている。

（玉田能成）

は全ての年代で全国平均を上回り、全体では69・7％となっていると説明。副反応の発生頻度が低いとされるノババックスワクチンは県内でも接種が始まっており「全ての接種希望者に対し、応じざるようになっている」とした。

県議会定例会で清水智信議員（自民党県議会）、渡辺大輔議員（民主・みらい）がそれぞれ代表質問したのに対し、服部和恵健康福祉部長が答えた。

県によると、五月下旬～今月十三日に県内の三百九医療機関を対象に調査したところ、二百四十四機関から回答があり、八十八機関が後遺症があるとみられる患者を治療したと答えた。百二十六人の内訳は男性四十四人、女性八十二人。年代別では三十代（三十一人）が最も多く、四十代（二十五人）、五十代（十三人）と続いた。症状別

ではせき32％、倦怠感26％、味覚障害13％と多かった。

流行の第一～五波では、九人が六カ月以上にわたって後遺症の症状があり、うち四人は現在も治療を受けているという。県によると、後遺症は原因不明な点が多く、治療は症状に応じた対症療法が中心となっている。服部部長は「地域の医療機関では適切な治療が行われている。症状に応じてかかりつけ医を受診してもらおうよう、県民に周知していきたい」と述べた。また県内のワクチン三回目接種率に関し、服部部長